

史学科・文化財学科誕生物語―博物館と共に

飯沼

私のタイトルは事前に出したものと少し違っておりまして、史学科の草創期のお話を中心にするのですが、今日は史学・文化財学科の誕生物語ということで、「博物館と共に」という副題を付けております。なぜそうなのかはまた追々お話をしてみたいと思います。

最初にざっくりと全体の歴史を振り返ってみたいと思います。本学は、一九五〇年に女子大学として創設されますが、一三年後の一九六三年、先ほど言いましたように、今日の史学・文化財学科の前身である史学科が産声を上げるようになりました。

それはちょうど東京オリピックの前年でした。思えば私も東京オリピックのころは小学校五年生ぐらいだったんです。この会場の方々はまず生まれていない人もかなりいるかなと思います。でも、最近の東京オリピックはもちろん皆さん知っています。つい最近、あつたばかりですのでね。

最初の東京オリピックの前年ということで、考えてみたらオリピックのころの東京は東海道新幹線、高速道路、首都高速等が造られるのですが、それらが出来上がって、まさに開発の時代の幕開けでした。要するに、俗にいう右肩上がりとか、高度成長の中でどんどん、地方も含めて開発が進んでいく時代、そう

飯沼賢司（特任教授、前学長）

いう真つ只中に生まれたのが別府大学の史学科だったので。

開発のラッシュという言い方をするとちよつとオーバーかもしれませんが、発掘調査、考古学の時代が訪れたのです。当初はもちろん学術調査が中心でしたが、その中にいわゆる行政的調査がやがてどんどん入っていくような。そういうことの先を、創設者賀川光夫先生は、おそらく予想して、これからは発掘調査の時代になるのだろうということを踏まえた上で、史学科の中心に考古学を置いていくと考えたと思っています。

一九七七年、これは今はもうなく、今は駐車場になってしまっている場所に、当時は大学創立三〇周年の記念館の形だったと思いますが、博物館機能を持った旧一八号館が完成しました。史学科の創立と博物館の創立をテコにしながら、西日本における多くの人材養成の拠点ができました。ここに今来ている方々の中にも、ここで勉強した卒業生の方も多いのですが、そういう有能な人材、特に発掘関係のプロパー、あるいは学芸員として活躍をしてゆきます。もちろん教職とか教員方面の方たちもいるのですが、なんといつても考古学を中軸に展開していつて、現在でも九州、西日本を含めると五〇〇名を超える専門職の方々が働く大学の基礎が出来上がったこととなります。

その後、一九九七年には史学科から別れて文化財学科ができました。私は一九九三年に別府大学に赴任します。賀川先生は、まだその頃は史学科に在籍していました。当時、賀川先生としては、ひとつは、文化財を基軸にした学科作りを考えていました。もう一つは大学院をぜひ作りたいという二つの夢があったのです。しかし、実はそれがなかなか実現できないまま、一九九三年、ちょうど私が来た年には、大学院の先生になる予定だった九州大学から来た森洋先生とか、あるいは山口大学から来た村上允英先生だったかな、そういう先生たちが残っていて、そのまま見込みが立たない状態になっていました。

その後、その夢の実現に向けて、私と後藤宗俊先生が中心となって、新しい学科構想と大学院構想をあわせて考えようということで、そこから議論を始めたのがちょうど九三年から九五年ぐらいにかけてのころでした。みんなで一生懸命、顔を突き合わせて、法人と史学科の人たちが議論をしながらやったのを覚えています。

そのときに、新しく環境歴史学とか民俗学とか美術史とか、保存科学、保存修復、それから建築史を置いた学科作りを構想しました。これが後の文化財学科になっていくわけです。学科開設と同時に、歴史学専攻という形で、史学科の上に最初の大学院を作ろうということになりました。歴史学専攻ですから単専攻なんですね。当時、大学院がなかったので文学研究科歴史学専攻ただ一つで、一九九七年、これは同時ですね、大学院と学科作りが同時並行しながら進められたことになりました。

あわせて一九九九年、最初の学科ができてから約二年たった後ですが、今そこに写真が載っていますが、三三号館。博物館施設

を含む歴史文化総合研究センターを作りました。ここで、文化財の拠点的なもので、今までの史学科からさらに広い形での文化財保護を含んだ形で幅を広げることが行われました。

今回、後でもお話ししますが、なぜ「博物館と共に」というタイトルを付けたのかということですね。

それは、常に史学科の創設、あるいはそれ以前から、史学の歴史、文化財の歴史は、実は博物館と深く結びついてきたことを少しお話したかったからです。

ところが二〇〇九年になりました、一八歳人口の減少の中で、史学科と文化財学科の存続は危機に直面しました。考えてみると、文化財学科を作った当時の文化財学科の定員は一〇〇名なんです。史学科の定員は一二〇名です。ということは、正規の定員だけでこの二つの学科を合わせると二二〇名。一時期は、考えてみますと、定員以上いましたので、その学科を四倍しただけでも約一〇〇〇名。当時、山本先生と研究室でよく話したときに、歴史学部とい



歴史文化総合研究センター (33号館)

う新しい学部を作ろうよという大構想を二人で夢見た時期もありましたけれども、ただやはり、残念ながら、その後の人口減少というか、要するに一八歳人口の減少の中で、これを二つ支えるのはとても難しい状況に立ち至ってゆきました。

最初の何年かは非常にいい感じでいっていただけなのですが、両学科とも厳しい状況に置かれていくということで、ついに二〇〇九年になって、一回り、一二年たったときに両学科を統合して、現在の史学・文化財学科という形に戻して、定員もここで一〇〇ということになりました。

そして、また二〇一七年には佐藤義詮記念館、新一八号館と言っていますが、これが完成をします。現在、駐車場となっているところにかつて博物館（旧一八号館）が建っていたのですが、その機能を原則全部そこに移す形で、現在の新一八号館は出来ます。その二階に、大学史展示室、そして横にギャラリーホール、そして上の三階にはアーカイブズセンターなどが入る建物です。

と同時に、その後、二〇二〇年になりますと、史学・文化財学科の学科が、大学院は史学の歴史学専攻と文化財専攻に分かれていたのですが、これも統合しようという話になりました、現在のようにならぬ大学院も史学・文化財学専攻という形になりました。大きく流れを言いますとこんなところです。

今日はこういう全体を踏まえた上で、特に史学科誕生期、あるいはそれ以前のころの話を中心に、少しお話をしてみたいと思います。

これが一八号館。確認のために写真だけを並べてみたのですが、外から撮るとあれが新一八号館。昔、一号館が「く」の字に曲がっ

て横にきていたのがなくなりまして、その場所而建てられました。二〇一六年の地震の際

は、この建物が前の建物をちょうど壊して更地になっていったんです。一号館の新築の建物だけが出来上がっていて、地震の被害のときには、あれが建っていたら大変なことになっていただろうなと思います。そこにこの新しい建物が建ちました。

先ほど述べましたように、ここには展示室があり、アーカイブズセンターがあり、そして二階の部分に大学史展示室があります。今は大学史という授業もあります。そういうものと連動しながら、大学のアイデンティティ



佐藤義詮記念館（新18号館）





史学・文化財学科 歴代教員一覧

を学ぶ場所として機能しています。

そして一番上には、ラーニング・コモンズのような学生たちが集まれるような場所、あるいは教室等がある。そういうものができました。

ギャラリーホールでの史学・文化財学科六十周年記念写真展は、先月（十月）まで開催していました。残念ながらホールの中で今日の記念講演会まで延長することができませんでした。

それで、そのときに飯坂先生に頑張って作っていただいたのが左の表なんです。歴代の教員。このスライドはあまりにも大きすぎて、そこからだとたぶん見えないと思います。雰囲気だけで見ていただきたいのですが、少なく見積もってもこれだけの教員、ほかにもいろいろ関わった人たちはいるのです。そういう方々が史学科の歴史を支えてきたのです。

そこでここでは、巨人軍ではありませんが、「史学・文化財学科は永遠に不滅です」と言いたいところです。要するにこの後も続いていくのです。その一つのプロセス。ちょうど六〇年という一つの大きな、人間でいうと一度六〇年でリセットされて、再び新しいステップ、新しい段階に至ることだと思えます。今日われわれのようなルートルというか、そう言う山本先生に失礼かもしれませんが、次の世代にどう受け渡していくのかということが課題で、今日私たちは講演を頼まれたと思っております。

ここから、草創期の歴史を辿ってみましょう。もちろん、そのトップにいるのは賀川先生です。今日の話はどうしても賀川先生が中心になると思います。皆さんは賀川先生と言っても知らない方々も多く、名前だけは聞いたことあると思います。先生関係の展示や出版がありました。昨年暮れから今年春にかけて「森の人 賀川光夫先生」というテーマで、ギャラリーホールにおいて展示会を開催しました。

そのときは賀川先生の個人の学問の問題、その人柄に焦点を当てました。史学科創設という観点から博物館創設というところに少し光を当てながら、今日はお話をしてみたいと思います。

賀川先生は第二次大戦中の一九四三年一〇月に学徒出陣。神宮外苑で学生たちが学徒に出陣する、その中にいました。そのときに学徒出陣式に出て横須賀海兵隊に入隊しました。大学は当時、日大文学部の中の史学科で勉強していたのですが、入隊して土浦で訓練を受けた後に少尉に任官します。当時の大学の人たちは、訓練を受けるとだいたい少尉任官する形を取っていたようです。そして、航空隊としての実践業務に就きました。

ただ、すぐに簡単に飛行機に乗って、右から左へパイロットになれるかと言われたら、これはやはり相当なにわか仕立てだと思います。ましてや文系ですから簡単にはいかないかなと思います。

どこに配属されたかという佐伯基地と書いてありますが、現在の大分県佐伯市にあった佐伯航空隊です。ここに配属をされまして、佐伯航空隊でさらに偵察飛行とかいろいろなことをして、沖縄方面まで行っていることが、先生の記録の中にも書かれています。

沖縄が落ちて、佐伯基地は、どんどん機能が低下して、宇佐の方に機能の本体が移るということで、宇佐基地に移動して、最後は八月六日の広島原爆のときに状況はどうだったのかを撮影、確認するために飛行機に乗ったと言われています。

結果、先生は大分で終戦を迎えることになったわけです。お生まれは栃木県の烏山というところ、かなり福島県寄りです。今の那須烏山市に当たりますが、結局、家には戻らずに、大分の地に残ることになります。

どうしてかというところ、航空隊の時代に佐伯というところで奥さまと知り合っていました。そして、もし生きていればという話ですが、どうも結婚を決めてお



航空隊時代の賀川先生

られました。戦後になって結婚をして、その後、一九四六年に大分に残って、佐伯の女子高等学校に奉職することになりました。佐伯女子高等学校は、現在の佐伯鶴城高校の前身になる名門の高校です。

ここから先生の大分の本格的な歴史が始まります。実は先生はいろいろなところに書いてあるのですが、大分県史蹟名勝天然記念物の委員に、一九四七年になります。考えてみたら、大学を出た直後ぐらいです。出た直後というのは、戦争中は軍務に就いていたので、四七年にいったん大学に戻って卒業証書だけもらいに行ったということらしいです。そのときにもう既に名勝天然記念物の調査委員になっています。なぜこんな若くして県の委員となつたかと思ったら、本人が書いている文によると、一九四二年、大分二年生のときに、学生の身分のまま紀元二六〇〇年記念事業に参加していて、「日本文化史大観」の編集助手を務めていました。

考えてみたら、その助手に任命されるのはよほど優秀だったのかということかと思うのですが、当時、文部省にいた広中さんが、後に大分県の社会教育課長になって、その縁があつて、賀川先生を知っていることもあつたのでしょうか。考古学の専門家は、考えてみたら地方では当時ほとんどいないんです。そこで白羽の矢が立ったというか、ぜひ天然記念物の委員になってくれと頼まれたと思いますけれども、そして、四七年に就任することになったのです。

ここが大分県にとって非常に重要な点です。翌年の一九四八年、早速、佐伯の有名な下城貝塚遺跡。考古学の方でしたら絶対に忘れられないような遺跡ですが、下城という名前がついた土器の形

式がありますね。私もよく分からないのですが、有名な遺跡です。それが後に整備されるのですが、その遺跡を担当することになりました。

すぐその後ですが、今度は一九四九（昭和二四）年、賀川先生は安国寺遺跡。皆さんに安国寺遺跡と言ってもピンとこないかもしれないですが、「弥生のムラ」のことです。史学・文化財学科の学生たちだったるときどこに行って、博物館実習で土器づくりとか勾玉づくりとかをやったりしますね。この安国寺遺跡は、賀川先生が最初に手がけた非常に重要な遺跡だったと思います。

この遺跡については、当時、河野清美さんという郷土史の方が懇願して、ぜひ調査をして



弥生のムラ



河野清美先生（賀川先生の絵）

くれと頼みました。スライドの写真の人が河野清美さんです。大変な名物というか有名な方でありまして、『国東半島史』という大部な著書を書かれています。その人は国東の出身で神官さんだったのです。ぜひ、あそこを発掘してくれと頼みに来たらしくて、それで始まったのがこの安国寺遺跡になります。

この安国寺遺跡の調査では、先生は最初に少し頑張りすぎて体を壊します。そして、初年度からまもなく中断をするということので、この調査を九州大学の鏡山猛先生に頼むことになりました。そこで九大の学生たちが関わることになりました。

ただ、九大といっても当時、史学科はありませんでしたが、考古を専門とする学生はほとんどいませんでした。だから、この時代の発掘は当時の史学であれば誰でも、西洋史であろうが東洋史であろうがみんな駆り出されたと言うぐらい、安国寺遺跡はそういう状況だったということです。この時期は食糧事情も悪かったので、安国寺へ行けば米を食べさせてやると言われて、つられて行った学生がいたそうです。私の先生、瀬野精一郎氏も、実はその中で声を掛けられた一人でしたが私は行かないと、強く断ったと言っていました。そういう時代だったそうです。

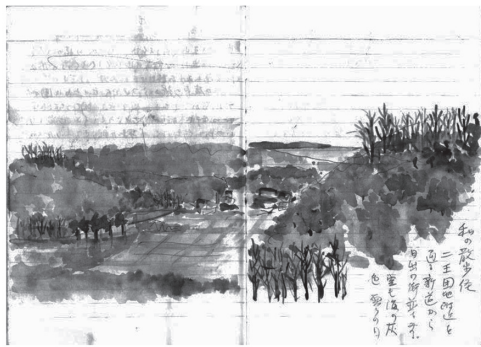
これが賀川先生と九州大学の本格的な交流のきっかけに、なっていると思うのです。共同研究をしていくと、結局最後はそういうことになるわけです。ご存じのようにこの遺跡の実態説明がどんどん進んでいくと、たくさんさんの木器が出てきました。西の登呂といわれるぐらい有名な遺跡として知られるようになります。後に報告書が九大の九州文化総合研究所で作られて、賀川先生、九大の鏡山先生たち、それから乙益重隆先生がそれを作ることにな

ります。

賀川先生は、別府大学にどうして来ることになったのでしょうか。それは一九五一（昭和二六）年のことです。先ほど言いましたように、大学は一九五〇（昭和二五）年に女子大学として出来上がっています。その翌年に、賀川先生は別府大学の講師として就任することになりました。そのあたりはやはり佐藤義詮先生は先を見る目というか、やがてきつと素晴らしいものになっていくんだという見通しを立てていたのだろうと私は思います。

賀川先生は呼ばれて、学長室に向かいます。当時はこの学校は森に覆われていたそうです。今の正門を入ると、そこから先は全部森で、校舎が全く見えないというぐらいの深い森の中にあつて、「この森の向こうに何かがあるんだ」と自分は確信したと賀川先生は後年言っていました。

それが賀川先生の森のこだわりのはじまりです。当時、イギリスのブランデンという詩人が来たときに、この素晴らしい森を大変褒めそやしたそうです。賀川先生は一貫して自然、特に象徴的な縄文の森というか照葉樹林の森に対するこだわりは、そういう自分の身



賀川先生のノート 自宅の裏山の森

近などころの森の発想からも生まれていると思われています。この写真は、賀川先生がノートに書いた自分の家の裏山の森散歩コースです。ここは裏に、日出の上のほうに湧き水があるんですが、そのところを休みのときによく散歩されています。先生は、常に森を見ると縄文時代の照葉樹林の森を思い浮かべるとあちこちで書いています。

一九五一年当時、別府女子大学はまだ開設されて二年目です。大学としては文学部単科の大学です。しかも女子大です。そして、国文学科と英文学科しかなかったんです。ということは、賀川先生のような考古学のエキスパートの方が来て、ではそこで学生を育てるかといったら、そういう場はないわけです。あくまでも教養として歴史学を教えるということであつたんです。

当時は安国寺遺跡を掘っていたわけです。つい先日、二週間か三週間ぐらい前に、この女子大の卒業生という方々が訪問されました。今ちょうど九〇歳と言う方々が三人です。その中のお一人が賀川先生に安国寺に誘われましたと言われました。女子学生まで誘っていたんですね。確かに、賀川先生はこのころの様子を見ると女子学生に囲まれているん



女学生と共に

です。こんな状況でありまして、探しても男はいないという状況で、安国寺へ来ないかと女子学生に声を掛けたのです。「私、声掛けられて一日二日行きました」という東京の方がおられました。当時の学校の様子はこんな感じですね。

賀川先生は、一般教養の教員として入ったわけですので、その先に考古学や歴史を専門に学ぶ学生を育てるという夢を、やはり遠くに見ていたはずですが、すぐには実現することはできませんでした。

そこでどうしたかという点、一九五二（昭和二七）年になりまして、考古学を中心にする上代文化の研究を行う別府大学付属上代文化研究所を作りました。上代文化研究所の所長は、学長である佐藤義詮先生、そして研究員として当時の助教授の、賀川先生が調査員となっています。

その他に杵築高校の入江英親さん、この人も有名な考古学の先生で、たくさんの考古・歴史資料を残しています。それから別府大学の佐藤暁さん。この人は日出の方です。その後も別府大学に關わって、賀川先生のところ助手としていたという人です。それから中津の教諭で島田義典先生。それから安心院高校の某さん。この方の名前が読めなかったのです。大分合同新聞の記事がつぶれていまして、それで黒になっていましては申し訳ないのですが、いろいろ聞いたのですがよく分からなかったんですね。その次が狭谷中学校教諭の二宮昭二先生。それから出馬中学の穴井通昭さん。ミチアキさんを俗にツウシヨウさんといわれて、やはり有名な郷土史の方だったんですね。

県内の本場に考古や歴史好きの方々を集めて、こういう研究所

を作ったということです。これがやはりその後の学科設立の布石になったと思います。

一九五四年、研究所の付属機関として、上代文化博物館が設立されます。その後、上代文化研究所の所員と相談して、それまでに考古資料を使い展示が行われました。所蔵資料が一万点。これはちよつとびっくりなんです。大分合同新聞に書いてあるから間違いないと思うのですが、当時既に博物館には、一万点も資料があったのです。一万点というのはどういう数え方をしたのかよく分かりませんが、多数の資料があったことがわかります。

これをなんとかしようということで、当時の九大の鏡山猛先生とか、あるいは熊本の本郷経堯さん、あるいは熊本女子大の乙益重隆先生、それから宮崎の郷土史の日高正晴さん。こういう人に相談して、彼らの協力を受けた上で、一九五四年に上代文化博物館を開設します。

当時の上代文化博物館は、別府大学の中には場所が確保できませんでした。大学の敷地は広いのですが、建物も資金もありません。

そこでどうしたのかというと、この大学通りの真下、今の国道10号線沿いに、現在は何もありませんが、かつてはそこに別府市美術館があって、その前身は海浜ホテルというホテルであり、六勝園といっています。六勝園の海浜ホテルのすぐ横に水族館があったのです。後で水族館の写真も見せますが、これも大分合同新聞記事によりますと、昨年一〇月六日、六勝園の所有者、菅沼寛蔵さんという東京在住の方の許可を得て、自由管理。敷地の五〇坪を委託されて、そこを使って水族館を博物館と看板を変え、そこ

に別府大学の上代文化博物館を設立することになりました。

今、皆さんが見ている写真に、博物館と書いてあって向こうに建物がありますね。これが昔の水族館で、ここで最初の別府大学の博物館が立ち上がったのです。

当時の合同新

聞の記事では、ゆくゆくは館の周辺を野外博物館として、住居跡、それから古墳の復元を計画しているというすごい夢を語っています。

最初の展示は宇佐虚空蔵寺の遺物展と、中国古美術展を開催したと書いてあります。ということは、このとき既に虚空蔵寺の発掘を本格的にやっていたということです。後でその話も出しますが、虚空蔵寺跡から出土した話題の遺物、それをすぐ展示して、タイムリーなものにどんどん展示替えをすることに挑戦していて、非常に注目を集めました。



六勝園の上代文化博物館

考えてみたら、まだ

当時、大分県に博物館なるものは全く存在していません。全国的に見ても、この時期の博物館はほとんどないと思うのです。ないというのは、大学の博物館として存在していたのは、この時期だと明治の刑事博物館ぐらいしかないんです。国立大学に至っては博物館と呼ばれるものすらありません。そんな時代にこのような博物館を作ったことになりません。

東京国立博物館の石田茂作先生が虚空蔵寺の発掘を見に来て、非常に感激されて、すごい遺跡だ。飛鳥時代の遺物が出ている。展示を企画するのだらというところで、国立博物館の遺物を貸してあげましょうと言ったという話が合同新聞に載っていました。

このときの初代の館長は、元広島大学教授の清原貞雄先生だったんですね。清原貞雄先生という方の話を少ししておいたほうがいいかと思うのですが、清原貞雄先生は、神道史とか宗教史の研究者として大変有名な方です。杵築というところの出身で、杵築はそういう意味で神道研究の、素地が江戸時代からあったところなんです。この人の神道沿革史、後にはこれを『神道史』という形で



上代文化博物館の展示室の中



大分合同新聞の記事 (1954年)

出した本は大変反響を呼びました。いわゆる神道学を目指す人たちにとっては必読の書といわれたものでした。

ところが、戦争中に、この人の考え方はどちらかというと天皇機関説的な考え方を持っている人で、軍部にいらまれて、戦後ではなくて戦争中、昭和一八年の段階に広島大学を追われて、結局、故郷の杵築に戻っていました。

一九五二(昭和二七)年に大分県の『大分県史料』を編纂する際には、私の先生である竹内理三先生。当時、九州大学の先生でしたが、一緒に大分県側の編集顧問という立場で編纂事業に参加した人でした。歴史学者としては当代一流の人で、大分県の中では非常に重要な位置を占めていた人ということです。

この『大分県史料』の編纂事業に関わったのが、後に八幡研究の第一人者として知られる中野幡能先生。それからもう一人は、

この方も私の研究室の前任の先生の渡辺澄夫先生。そういう意味で非常に二重三重と私には縁があります。私の研究は、中野先生の研究領域や、渡辺先生の研究領域が基礎となっています。そういう関係がある方です。

この人を初代の館長に迎えたということは、当時の大分県の中では上代文化博物館の位置はどれだけ重要であったかが、自ずと分かるかと思えます。

賀川先生のそういう奮闘努力もありまして、別府大学上代博物館が昭和二九年に始まりました。その年の合同新聞には「別府大学上代博物館の開設に努力した賀川光夫」というタイトルの記事が載っています。その前年の秋の十一月、先ほど私は紹介されて恥ずかしながらの受賞ですけども、合同新聞文化賞。これは昭和二四年から始まったそうですが、賀川先生はなんと三〇歳で、私の半分以下の年齢で合同新聞の文化賞をもらいます。よほど注目されたということですね。当時、要するに安国寺遺跡、早水台遺跡などの文化財の発見が、やはり非常にインパクトがある業績であったと思われれます。その到達点が、博物館の設立でした。

上代文化研究所があつて、正確にいうと上代文化研究所の付属の博物館として上代文化博物館があるわけです。だから、文化研究所はまさに、今でいうと文化財研究所があつて、そして博物館があるような関係と少し似ていますが、賀川先生は一九五四年を前後して、上代文化研究所であちらこちらの遺跡の発掘を手がけています。

先ほどの県内の考古好きの先生方を集めて、そういう人たちが動員したり、あるいは九大の学生を動員したりして、実はあちこ

ちの遺跡を。もちろん先ほどの安国寺遺跡があるわけですが、それだけではなくて九州大学のある福岡県の大宰府遺跡の調査、そして一九五三年には糸島の支石墓の遺跡の調査とか、県境を越えてだんだん調査が広がっていく様子がよく分かります。

さらに、東北大学の芹沢長介先生が行った有名な早水台の遺跡ですね。この遺跡の調査をこの時期に共に手がけることになりました。

博物館のできた年には、既に竹田の七つ森古墳、そして彌野野遺跡、別府の実相寺遺跡。実相寺遺跡は太郎塚、次郎塚と呼ばれて、大学からすぐ上のところに整備されていますが、これらの調査をしています。

そして、宇佐において
は宇佐弥勒寺の調査が進んでいきます。先ほど言った虚空蔵寺とか法鏡寺と呼ばれる古代寺院跡、そして弥勒寺と呼ばれる宇佐神宮境内の神宮寺跡、こういうものの調査は賀川先生によって本格的に始められていったことが分かります。

一九五五年には安国寺遺跡の整理が行われて、報告書が九大の鏡山先生、



呉橋の写真

そして熊本女子大学の乙益先生、そして賀川先生によって作成されていくことになりました。

賀川先生は、この年には法鏡寺の遺跡を確認します。それから宇佐八幡の弥勒寺、虚空蔵寺という宇佐関係の調査を本格的に進めていきます。今、ここに出ている写真は、宇佐神宮の呉橋という橋。まだこのときは仁王門が建っているんですね。スライドには絵葉書を出したのですが、戦後のまだこの段階までであったのだと思います。

賀川先生の原点、熊野磨崖仏。賀川先生は後でお話をしますが、たくさん磨崖仏の調査をしています。これはアジア、中国、そういうところに出かけていくのですが、その原点は私は意外と古いところにあるのだなと今回調べていく中に、初めてわかりました。

賀川先生は実は昭和一〇年代の半ば、一六年ぐらいに、なんと学生時代に日豊本線に乗って、立石に下りて、そこから一人で歩いて熊野磨崖仏にやってきました。ちよつとびっくり仰天というか。その当時、熊野磨崖仏になぜ来るのか。だって、東京の学生ですよね。どれだけかけて九州まで来るのか、九州へ来てわざわざ熊野磨崖仏まで来るのか、ちよつと驚きましたが、石段をあえぎながら登って、そして磨崖仏を拝顔したことを絵に描いています。

その後、もうそれから十数年たった後に、熊野磨崖仏が国の指定になります。その事前の調査として、その左のほうにあるのは賀川先生が描いた絵ですが、賀川先生は拓本をとるのが大変上手だといわれています。

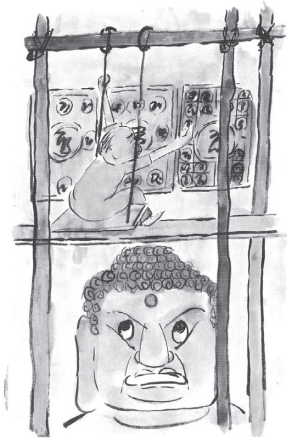
私は賀川先生が拓本をとったところを見たことはありません。この中では賀川先生が拓本をとったところを見た方もいるかなと思

うのですが、その能力をかわれて、文化庁の齋藤忠先生ですね。

後に東大の先生になる齋藤先生、磨崖仏の大家といえる人ですが、この人に頼まれて、熊野磨崖仏の上に乗って、拓本をとったという事です。これは大日如来の上のところに曼荼羅があるんですね。種字曼荼羅と呼ばれる。それをとったといわれています。

その後、賀川先生の研究は、一九五七年は大分県、さらに県外への展開がどんどん進んでいくのですが、皆さんご存じのように世界遺産になった沖ノ島の第二次調査にも参加しているという事です。翌年、一九五八年には、日本考古学協会の推薦で、沖縄県における先史時代の遺跡の調査ということで沖縄県に出かけて行きました。

沖縄県は洞窟遺跡というものが、当然想定できる場所でした。いわゆる鍾乳洞のようなものも含めて、そういうところは旧石器時代の遺跡が残っている可能性があるという事で行ったのですが、まだ戦争の傷痕が激しくて、とても調査ができる状態ではあ



熊野磨崖仏の拓本をとる(賀川先生の絵)

りませんでした。

そこで、自分の先生である八幡一郎先生から頼まれていたことがあって、一つは琉球の首里城の横にある円覚寺というお寺のことです。この様子を見てきてくれと。どうなっているのか。円覚寺に行ったら、円覚寺の池というか庭園が残っている。ぜひこれを壊さないようにということで、本人が当時の司令官に申し入れて、直談判をしたという話があります。

要するに、民政長官と談判をして、アメリカ軍との直接交渉でなんとかこの遺跡を保存することに成功しました。賀川先生のある意味で遺跡保存の道のはじまりというか、一つの重要なターニングポイントになったのが、一九五八年のこの沖縄の調査ともいわれています。

それから、これはぜひお話をしておかなければいけないことです。聖嶽の調査については、東北の神の手事件から、先生は自死され、大学は大変ひどい目に遭いました。私は当時の文化財学科の学科長をしていまして、その最前線に立たされていまして。

その調査がちょうど一九六一年。これからお話をする一九六三年の学科創設の直前になりますが、東京で当時、慶應大学の江坂輝弥先生、それから東北大学の芹沢長介先生、賀川先生が話し合って、洞窟遺跡の調査をする専門部会を置きたいということになり、翌年に八幡一郎先生と相談をした上で、日本洞窟遺跡特別調査委員会。これは考古学協会の中に置くという形で始められたものです。つまり、考古学協会の調査として長崎県の福井洞穴、そしてもう一つは聖嶽洞穴という、この二つが選定されました。こうして、聖嶽の調査が始まりました。

そのときの二人の様子を描いたのが下の絵です。こちらの二人、賀川先生と新潟大学の小片保教授です。上のほうに人骨、ドクロがあり、さすが、なぜあそこにあったのかというと、あれが問題でありまして、この人骨



賀川先生の絵

が旧石器人の人骨かどうか。それまでほとんど何も出なかったのですが、これを見つけたときに、頭のこの部分が大変厚くて、非常に北京原人的な様相を示しているということで話題になったのです。

そういうことから、この遺跡は大変注目されることになって、後々重要な遺跡と思っただけですが、皆さんご存じのように二〇〇一年に例の東北の石器捏造に関連して、実はその石器は後の人の手で入れられたというような、そういうあらぬ憶測というか、そういうことになって新聞記事で騒がれました。実際は新聞記事ではなくて『週刊文春』という雑誌ですが、これがきっかけで先生が自死するという大変な事件になりました。

でも、よくよく調べていくとそんなことは一切なく、われわれも裁判に立ち上がって、最高裁まで戦って、文春から謝罪文を取りました。間違いなく、そんなことはなかったです。要するに、

何か起こるとそれに便乗して、いろいろなことをどんどん広げていくような、そういう事件になっていったのです。

ただ、この事件は一九六二年のこの前年、賀川先生たちの研究を考えていく上で、別府大学の研究発展の中ではやはり重要な位置付けを持つ遺跡だったと、私は考えています。

この頃、賀川先生は旧石器時代というものに対して非常に強い関心を持つと同時に、縄文晩期の農耕論にこだわり、研究を進めていました。それは一九六〇年ころの「九州縄文晩期二〜三の問題」という早稲田大学での発表から、晩期農耕論の問題点を考え始めている形跡があるんですね。

その後、一九六五年に「農耕文化起源に関する合同研究」として、緒方町というところの大石遺跡で、いわゆる別府大学とか東京大学、東北大学、九州大学が参

画して、いろいろな調査をして、ここで扁平打製の石斧とか、あるいは石包丁とか、磨棒とい

われるような、いわゆる畑作農耕に使ったと思われる道具、石器を見つけたというところで、非常に注目をされることになりました。

これも当時としては先進的な研究でした。しかし、残念ながら



大石遺跡の賀川先生

論文等はあるのですが、正確な報告書が作成されなまま現在に至っています。写真は、当時、賀川先生が、発掘現場にいるところの場面です。

実はこの一九六三年の前後は、考古学の研究が対外的にも県外も含めて、一段と展開をしていく時代であったということです。一九六三年の学科ができると同時に、これは私の後で、山本先生が具体的に詳しくお話をしてくれることになるかと思いますが、日仏合同調査が行われることとなります。

これも要するに、国内的にいろいろな大学との協力、そしてさらに、他に世界的なところとの連携。これは多くの場合は九大を通してということですが、この研究もそうですが、九州大学を通してだんだん世界へ広がっていくこととなります。つまり、学科として充実をしていく中で、世界への展開が見えるのが、この日仏合同調査。ここでは、これ以上、私は詳しい話はいたしません。

そういう中で史学科が誕生してゆくのです。これが一九六三年、先ほどの話によく戻ってきました。賀川先生の長年の夢であった、まさに史学科が設立されたのが、この六三年になります。それまでの上代文化研究所、それから上代博物館、この成果を基にしながら学科の申請がなされたこととなります。

つまり、その前の一三年の歴史があつて、史学科が生まれ、そして時代がそれを求めたというのが、私の最初の話ですね。当時、東京オリンピックの前年であった。そういう、まさにそれは時代の要請でもあったということです。また一方でこれまで述べてきたように、別府大学ではこういう学科を作る前提が、そのときにはできていたのだと言えるとと思います。

教員は賀川先生を中心に、今永清二先生、一九四一年生まれ。東洋史の先生です。今永先生も大分出身です。そして志垣嘉夫先生。一九四〇年生まれ。西洋史の先生です。日本史では古代史の河野房男先生。この方は随分年が離れていまして、一九〇三年生まれということでした。それから後藤重巳先生。一九三四年生まれ。後藤先生はそのときは附属高校の教員として参画をしていて、助手的な役割だったと思います。

大分大学の加藤知弘先生が、非常勤といいながらほとんど専任と同じような扱いで働いていました。賀川先生の姪御さんのご主人になる方なんです。そういうこともあって、賀川先生は非常に気心がしれていたこともあったと思います。一年後に林章先生が加わりました。一九二三年生まれの東洋史の先生でした。当時、これだけの教育環境、研究環境が備えられた大学は、地方の大学ではなかなかなかったのだらうと思います。

今回、六十周年の展示のために、写真を苦労して集めたのですが。若いころの写真であればもう少しよかったです。晩年の写真をばかりです。先ほど紹介した賀川先生、河野先生、そして今永先生、後藤重巳先生、志垣先生、林先生、加藤先生、こういう方々が当時の布陣というかに関わった人たちになります。

ここから先は、今度は少し学生の視点から史学科の誕生を考えたいと思います。示しているスライドでは「別府大学の旗を立てる」と書いていますが、その写真は第一期生が作った旗です。いろいろ聞いてみると最初の入学生は八人で、途中で一人加わって九人になったというので、いつの段階でこの旗を作ったのかは私も分からないのですが、よく見ると、九つ、九条の日輪になっ

ているんです。今日、参加されている第四期生の佐藤正博さんに聞いたところ、途中で一人編入した学生がいるからということで九人かなと言われました。

彼らのほとんどは、最初の学生たちは今風にいうと考古学オタクという学生たちでした。昔で言えば考古学少年のような人たちがやはり多かったようです。第一期生の人たちが、こういう旗を作ろうとしたんですね。それは現在、大学史展示室にも展示されていますが、周りにARCHAEOLOGYと書いてあります。考古学ですよ。そして真ん中に日を入れて、ヒストリーとして別府大学史学科を示しました。

これは学科で作った旗ではないですね。学生たちが自分たちで作った旗。つまり、彼らの一つの思いというか、それがこの旗の中に込められていて、一〇年前の五〇周年のときにこの旗を第一期生の人たちが持ってきて、大学に寄贈しますということ、ちょうど祝賀会のときにこの旗が披露されました。

当時は考古学イコール、ヒストリーだったんですね。最初のころは、たぶんそんなイメージが非常に強かった。そういう感じですよ。この写真は一九六六年の入学式。割と早い時期。要するに最初の



第一期生が作った史学科の旗

ころの、六三年からしばらくたったころです。これはどこでやっているかというところ、今の別府の中央公民館だったと思うのですが、その舞台で入学式をしたときの様子だそうですね。

一九五七ころ、史学科ができるころの全国での歴史の博物館は、総数でも四〇ぐらいいしかなかったといわれています。本学の先進性。つまり五七年ということは、それよりも前に大学の博物館を作っているわけですから、非常に早くから博物館を作って、そして一九六三年の史学科の創設とともに、学芸員養成課程の実習施設という形になりました。大学に博物館を持ち、学芸員を自前で養成できる大学は、当時ほとんどなかったのです。明治大学があったのでしようけれど、そのくらいしかなかったような時代でした。

だから非常に先進的な試みでした。ただ、それも先ほど言ったように、「博物館ありき」だったんですね。あったからこそ逆に来たということか、そういうことかと思えます。



1966年の入学式

先ほどの六勝園の上代文化博物館は、史学科ができて間もないころ、一九六五年か六年ごろ、調べても正確によく分からないところなのですが、そのころになると土地問題というか、奇特定方が土地を自由に使用していいよと言っていた土地の使用がむずかしくなります。この写真を見てください。同じ施設に先ほど博物館と書いてあったのですが、ここに何と書いてあるかというと、水族館と書いてあります。この水族館を博物館という看板に変えて、そして上代文化博物館がここにできていたわけです。

それが十数年たって、どうもその土地を自由に使えることではなくなつて、ここから移転をしなければいけないことになりました。それで、一万点以上あった資料を大学の構内に、それを移すということになりました。

移すといつても、こういう事態の中で移したわけですから、最初は教室というか研究室というか、その中に放り込むような状態であったようで、考古学研究室で收藏されると言ってもいいけれど、そこは展示室という代物ではなかったと思います。後に仮展示室が作られるのですが、そのころの学生の動きとして、一九六八年ころ、上代文化博物館再建運動というのが起こったそ



上代文化博物館以前の水族館時代の写真

うです。

一九六八年というところは中学校のころで、やがて高校に入るころ、どんな時代だったかというところと七〇年安保。まさに世の中は、当時はやった言葉は大学当局とか、そういう言葉で大学を批判するような風潮の中で、要するに、学生たちが主体的にいろいろな運動をするような、そういう時代でした。

そういう中で、この会場におられる佐藤正博さんたちが出した『国史纂集』という雑誌の中に、これは佐藤さん自身が書いたのですが、「別府大学博物館設置の現状と博物館講座」というタイトルの一文があります。これが引き金になったわけではないのですが、その同じころに考古学研究室の、Tさんという人が中心になって、こんな博物館でいいのか、あるいは図書館はどうなのかと、学生たちが相当不満を持っていたようです。それをなんとかしたいと思う心の内を打ち明けて、佐藤さんは、創刊号にこれをぶちまけたような感じで書いた文章だそうです。

実は掲載するよりも前に史学科の教師陣は、いち早くその情報を察知して、当時の博物館およびカリキュラムに関する史学科教師陣とは話し合いがなされたそうです。とりあえずまず仮の博物館を作るから、なんとかカリキュラムについてもこれだけするかというのを学生に伝えてきたということで、学生に対する当時の教員の反応は早かったそうです。

当時のことについて、佐藤さんは後にこんなことを書いています。「今、創刊号を読み返してみると、史学科教師陣と学生は本音でぶつかり合ったことが昨日のように思い出されてならない。草創期の教師陣は皆若く、学生の距離も近かった。設備は貧弱であつ

たが、共に改革し、よい方向へ進めようとする点では皆一致していたのである」、そういう思いだと振り返っています。

ただ、よくよく文章を読むと、この『国史纂集』は結構過激な文書を書いています。今日はご披露しませんが、なかなか皆さん、当時はやはり血の気が多かったんだなと改めて思うような文章です。

下のスライドの写真が、その第四期生。ちょうどその時期に四年生だったというのは、佐藤さんたちのこの期生で、この時期になると結構たくさんいるんですね。つまり最初はわずか九人ぐらいたった学生たちが、卒業式のころには相当人数が増えてきています。創設からわずか四年間で話題を集めて、人が別府大学にどんどんやってくる事態になったのだとよくわかります。

これは一九七〇年ころの史学科のアルバム写真です。これは少し後です。一九六九年。女性も何人かいますが、やはり圧倒的に男が多いですね。こういう形で当時、別府ニューグランドホテルで謝恩会が行われたのですね。ニューグランドホテルは、現在の



第4期生たち

城島高原ホテルです。

そこでパーティーをやったんですね。祝賀会。これは卒業式ではないです。卒業式の後ですね。

研究室活動と会誌の発行という、先ほどありましたように、当時、最初のころは考古学イコール歴史学だった学生たちを、先ほど言いましたように、人数は増える

とともに徐々にいろいろな、要するに歴史学全体を勉強したい、あるいは文献を勉強したいという学生が増えてきます。六〇年代の終わりころになると安保の闘争の中、学生たちは教師と共に独自の歴史の道を探り始めるという方向が見えてきます。

学科草創期から、考古学研究室では『ちかたび』という雑誌を出していました。地下足袋を履いて、そして現場に行くという現場主義の意気込みが見える雑誌です。その後、同じころですが学生の研究会の中に歴史研究部というのがあって、『歴史の海』という雑誌を出していました。これは沖縄の調査とか、大分の海部方面の調査を島でやったり、盛んにフィールドワークを一生懸命やる学生たちが集まっていました。ここにも多くの学生が参加し



1969年の卒業記念祝賀会の写真

ていました。

そういう中で、調査しているうちに現地で古文書に出会って、これ読みたいねという話になったのだと聞きましたが、それで勉強を、これも失礼な言い方かもしれないけれどオタクと言いましたが、『国史纂集』という雑誌が一九六九年にガリ版刷りで創刊されたということです。

この創刊号には、他の研究室を厳しく批判するという文章がいくつか載っています、その中に博物館は改革をしろということが書いてありました。

こういう学生主体の雑誌が、まさにこの草創期からいくつもいくつも出来上がっていくのです。その刺激を受けると、今度は西洋史もこういう雑誌を作ってみたい、東洋史もこういう雑誌を作ってみたいということで、各研究室で研究室の雑誌、そして研究室の独自の活動が始まります。それに伴って、今のわれわれの史学・文化財学科のいわゆる研究室活動。現在、史学研究会の中に入っている各研究室の活動の原点はここにあります。まさに伝統は学生の自主的な研究から始まったのです。

極論ですが、先生がいるのは大事ですけど、先生よりもやはり学生が自分たちでどうするか、そこが大事だということなんです。

これが雑誌です。この前、展示したときに一応、それぞれ雑誌を撮ってみました。『シルクロード』ですね。これが最初のころの『歴史の海』とかですね。ここに『ちかたび』があって、これらが『国史纂集』ですね。いくつか出します。

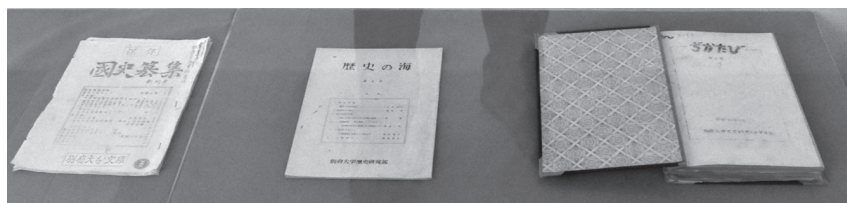
ここにあるのが『クリオ』、西洋史ですね。その次には『中世の

友』。それから『緑林』とか。これは東洋史かな。あと、いくつか雑誌、『史朋』とか『あぜみち』というのがあるんです。『あぜみち』は私の研究室で出していた雑誌です。あぜ道を歩き調査した産物です。

そういうのが次から次へと、今でもこの伝統は生き続けています。要するに作っては消え、作っては消えの状態ですが、そういうことをずっとやってきました。これが別府大学の史学の伝統と言えるかと思えます。

一九七〇年代に入ると、賀川先生自身も、それからいろいろな先生たちも含めて、先ほど言った、大分そして九州のいろいろな地域の調査、そして先ほどフランスの話をしました。が、何十年代になると本格的にあちらこちらの海外の調査に出ていくようになります。

韓国のソウル・扶余・慶州。そして一九七七年のインドのアジャンター・エローラの遺跡。これは先生が絵巻物にしていますから見た人もいるかなと思います。七七年、ちょうど旧博物館、前の一八号館ができた年のことです。一九八〇年は中国の学術調査、これは敦煌。これも写真が残って



草創期の研究室雑誌

います。それから雲崗の研究。これはこのころやはり磨崖仏というものに結構こだわっていました。賀川先生の趣味の問題もありますけれども、一九八〇年代、北京原人とかラマピテクスの調査。それからあとは一九八二年の龍門の石窟の調査。そして旧石器古人類の調査として、国際シンポジウムを一九八二年にやっています。それは、それまでのいろいろな調査を踏まえた上での国際シンポジウムに参加しています。そしてあと焼畑。それからビルマのパガン。これは仏教遺跡ですね。そしてインドのサンチ遺跡。それから新疆タクラマカンの砂漠の遺跡、そしてインド、ネパール。挙げていけばまだまだずっと続くのですが、こういうのが

一九七〇年代から一九八〇年代にかけて、ずっと調査がありました。要するに、最初にお話ししたように、賀川先生の展開は史学科ができたときから、単なる地域ではなくて、世界に羽ばたくことを強く意識していました。この展開は、賀川先生の飽くなき好奇心の結果だと思いません。

賀川先生の念願の



賀川先生の絵 右は旧18号館

博物館。さきほど言いましたように、さんざん学生たちから批判を受けて、そして一九六八年のころになんとか仮の展示室を作った、そして博物館の学芸員課程の授業の整理を行ったりしていたのですが、念願の博物館を一九七七年に完成させました。これが旧一八号館、今やなくなっちゃったものですが、賀川先生はこのときに、「松林我が城そびえ春うらら」と書いています。「我が城」というのは、確かにあそこに博物館長の部屋がありまして、先生のお部屋は三階に館長室がそこにありました。その建物には重巴先生の研究室と史料書庫がありました。これが今のアーカイブズセンターの前身になります。

だから、後にここから発展していくのが、最初にお話しした三三号館の博物館。そして、今の一八号館。現一八号館は大学史展示室等がその機能を受け継いでいます。旧一八号館には四階に展示室や収蔵庫があり、一階には実習室のような部屋がありました。二階に講堂があったんです。百数十人が入れるような部屋があつて、ここでだいたい史学研究会の大会をずっとやってきたのです。そこが史学の拠点でした。

賀川先生は、考古学の新しい施設が着々と完成へ向かっているんだということで、それが「我が城」だと言っていますので、本当に賀川先生の夢が形になったのが、この一九七七年だったと思います。

今日の話はだいたいこの辺で、終わりにしたいと思います。これ以上進んでいくと時間がありません。最後に、一九八二年の段階の写真をお見せします。どんな先生がいたか。今につながる先生は、この中では山本晴樹先生だけです。一番上のほうから見る

と左側に、橘昌信先生が三列目ですね。真ん中に山本先生です。若々しい先生ですけれど。そして右側に利光正文先生。二列目の左側には坂田邦洋先生、考古学ですね。真ん中が伊藤勇人先生、古代史の先生です。そして、その

右は渡辺澄夫先生。これは私の前任の先生で大分大学から来られていました、荘園史の大家です。そして前列の左側に後藤重巳先生がいて、そして賀川光夫先生がいて、林先生ということになります。

山本先生が写っている写真を最後にしたのは、次にバトンタッチをしようと思いついて、ここから先を含めて、山本先生が国際関係に視点を当てながら、話をしてくれることになると思いますので、私の話はひとまずこのあたりで終わります。

もし時間が残りましたら、山本先生と私が最後に、ばか話を少しして加えてみたいと思います。

では、以上で私の話は締めたいと思います。



1982年の史学科の先生方の写真

参考文献・資料

- 『学校法人佐藤学園の八十年…別府大学』（佐藤学園 一九八七年）。
- 『別府大学開学ものがたり―建学の夢はかたちになり受け継がれる―』（飯沼賢司・山本晴樹著 別府大学 二〇二二年）。
- 『賀川先生還暦記念論集』（賀川光夫先生還暦記念会 一九八二年）。
- 賀川光夫『瓦礫（がれき）』（山口書店 一九九三年）所収の賀川先生の絵。
- 『賀川光夫・人と人生』（賀川光夫先生古稀記念事業会 一九九三年）。
- 『史学論叢』32号（別府大学史学研究会 二〇〇二年）所収「賀川光夫先生の足跡」
- 『賀川光夫先生「アルバム・作品・追悼文集・年譜」』（賀川光夫先生追悼文集刊行会二〇〇三年）。
- 一九七七年製作 賀川光夫先生絵巻物の旧一八号館の完成の絵（前掲『賀川光夫先生』所収）。
- 大分合同新聞記事。
- 『国史論集』創刊号。
- 二〇二三年一月開催 「別府大学史学・文化財学科創立六〇周年記念展示」使用資料（賀川家提供賀川光夫先生アルバム・史学科第4期生佐藤正博氏提供写真・史学科第6期生遠藤隆義氏蒐集別府大学写真コレクション・山本晴樹氏提供写真・史学科アルバム・文化財学科アルバム）。

司会

飯沼先生、ありがとうございました。史学科、文化財学科、それから史学・文化財学科の歩みと、その節目節目で重要な役割を果たした博物館の設置、移転、再建等々に携わってこられた皆さまのご努力などの歩みをお話しいただいたかと思えます。

それでは少しプログラムよりは早いのですが、ここで休憩をはさみまして、休憩の後に本日お二人目の山本先生のご講演へと移りたいと思います。現在一四時二五分ですので一〇分間の休憩として、一四時三五分から再開したいと思います。それまで暫時休憩といたします。

(休憩)

司会

本日のお二人目、山本晴樹先生にご講演をいただきます。私から講師の山本先生のご紹介を申し上げます。山本晴樹先生は古代ローマ史をご専門とされ、一九七五年に別府大学文学部史学科に着任され、以後、本学における教育研究活動にご尽力いただきまして、二〇一七年をもって本学を退職されました。

現在は、本学の名誉教授としていくつか授業をご担当いただき、教鞭をとっていただいているとともに、本学の国際学術交流、共同研究等々においてもお力添えをいただいています。

本日のご講演はそうした方面に関するお話ということで、「史学・文化財学科の六〇年と国際学術交流―日仏共同研究を中心に―」というタイトルで、ご講演いただきます。

では、山本先生、よろしくお願いたします。